

<前回>内村鑑三と近代キリスト教の可能性

<内村鑑三> 1861-1930.

思想家、キリスト教伝道者。東京外国語学校を経て札幌農学校。クラークの残した「イエスを信ずる者の契約」(札幌バンド)に署名。M.C.ハリスから受洗(1878)。卒業後開拓使に就職、札幌教会設立。農商務省水産課勤務。84年アメリカへ。知的障碍児養育院で働く。85年、アマースト大学入学、総長シーリーの感化で<回心>を経験。ハートフォード大学入学、中退。88年、帰国。

第一高等中学校勤務、91年、不敬事件。退職。貧困の中、『基督信徒の慰』『求安録』など執筆。『万朝報』英文欄記者、『東京独立雑誌』主筆、ジャーナリストとして活躍。1900年、月刊誌『聖書之研究』を創刊、聖書研究会を開始。無教会主義を唱道。足尾鉍毒事件反対運動を展開。ロシア開戦の状況下で非戦論を唱え、万朝報社を退社。第一次世界大戦が起こり、近代文明を批判し、再臨運動に参加(1918-)。

「生涯のモットーとした2つのJ (Jesus と Japan) でもわかるように、日本の思想界に日本を超越する視点を、観念的ではなく血肉化して与えた影響は、キリスト教界にとどまらない」(『岩波キリスト教辞典』より)

- ・官僚→教育者→ジャーナリスト→伝道者
- ・二つのフロント=2つのJ

↓

非戦論・愛国

日本的キリスト教

(1) 非戦論と愛国のメタファー化

1. 二つのJ

- ・愛国者としての出発、しかし、不敬事件(1891年1月9日)。
- ・その後、非戦論を展開。同時代の民族主義としばしば軋轢を起こしながら、近代日本の戦争政策を批判しつつ、キリスト者として信仰を貫いた。一見すると、内村は反民族主義者であったかのように見える。しかし、依然として愛国者。

2. 「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」(1885年、新島襄宛の手紙)

↓

キリスト者としての自己同一性の原点である Jesus と自らが置かれた歴史的状況としての Japan、この双方を同時に愛する、これはどのようにして可能になったのであろうか。

4. 「二つのJ」の構造。同じレベルでの並置か?

内村の墓碑銘にも刻まれた、「I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God.」という言葉。

一定のコンテキストにおける「日本」→通常「日本」(字義的?)からの意味の転換。

↓

日本と明治政府との区別。

理想と現実(「日本」の指示の二重化)。

現実の逸脱した民族主義と本来の目ざすべき民族主義との二重性が生じる。

5. 現実の日本を批判しうる愛国

「日本」が進むべき道を誤ったときに、キリスト者は、「イエス」「神」という視点からそれを批判する義務を負っていることを意味する。

批判原理としての宗教(相対化の視点としてのキリスト教):「足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。」(「鉍毒地巡遊記」)。

カント:幸福と正義(福と徳)との関係性。あるいは、共同体主義とリベラリズム

6. 愛国の意味転換 (=メタファー化)

愛国の中身、愛する国の具体的内実が問題となる。

日本の近代化がめざした富国強兵(経済的・政治的・軍事的「強国」)から、農業を中心とした非軍事的な小国へ。

「デンマーク国の話」(『後世への最大遺物・デンマーク国の話』岩波文庫)

7. 「神の国」という尺度を用いた理想的な国家。

民族を超える民族主義(自己超越的民族主義)

cf. 自民族中心主義的排他的民族主義、脱民族的コスモポリタニズム

↓

開かれた形ある隣人愛: 神への愛は、具体的な人間関係(隣人愛)において現実化するが、隣人愛の範囲は前もって限定できない。

↓

8. 民族のメタファー化。

1) 民族は虚構である。(第一度の指示の否定)

2) 虚構こそが人間的現実である。(第二度の指示の開示)

(2) 内村鑑三の日本的キリスト教

内村の「日本的キリスト教」と鈴木大拙の日本的靈性論。

(3) キリスト教史のなかの無教会

20. 「無教会=ゼクテ」仮説は、プロテスタンティズムの徹底という無教会主義の自己理解とうまく合致しており、しかも戦後社会科学の枠組みにぴったりと沿うものであったために、通説として流布することになる、「この仮説には大きな問題点がある」、「無教会では・・・メンバーシップ(成員資格)を定める規則や儀式(聖礼典)をもたないことが強調される」(同書、18)

21. より最近の研究動向。「神秘主義」仮説である。

澁谷浩らの研究。赤江は、雑誌というメディアによる無教会の伝道方式において展開された「紙上の教会」という無教会理解と関連づけることによって、「神秘主義」仮説を支持している(同書、20)。

24. 無教会キリスト教との関わりの深化プロセスとして「読者→聴衆→会員」という順序・パターンを想定すること(赤江、2013、127)が、また無教会の社会的集团的性格についてはゼクテと神秘主義の二重性あるいは両極構造と捉えることが必要であり、無教会キリスト教を二つのいずれか一方に還元することは困難である。

26. ゼクテと神秘主義との両極構造が近代のキリスト教に特徴的なものであること。

キリスト教史における無教会キリスト教の位置をその近代性から解することが可能になる。

7. 無教会キリスト教の系譜から

・無教会史研究会編『無教会史Ⅰ 第一期 生成の時代』『無教会史Ⅱ 第二期 継承の時代』『無教会史Ⅲ 第三期 結集の時代』『無教会史Ⅳ 第四期 連帯の時代』『無教会史Ⅲ別冊 対論——教会と無教会』新教出版社。

・藤田若雄『内村鑑三を継承した人々(上) 敗戦の神義論』『内村鑑三を継承した人々(下) 十五年戦争と無教会第二目』木鐸社。

(1) 塚本虎二と無教会のダイナミズム

1. 近代以降のキリスト教の一つの可能性。集会と雑誌、あるいはゼクテと神秘主義は、内的緊張をはらむ両極構造 → 無教会の多様性

2. 「この「無教会」とは、明快なようであるが実は複雑な要素を含んだ概念である。ゆえに、「無教会とは、教派的組織なのか、運動なのか、それとも思想・理念なのか」、という問いに対して明確な答えを導き出すことは困難である。少なくとも、内村鑑三が「無教会」という言葉を用いるとき、そこには大きく分けて二通りの意味合いがあるように思われる。広義の無教会、すなわち理念としての無教会を指す場合と、狭義の無教会、すなわち具体的な彼と弟子たちによる集団としての無教会集会を指す場合と、である。」(岩野、2013、147)・無教会が「彼の伝道活動の形態を指すものとして使われた最初の例」は、1901年のパンフレット『無教会』である(同書、149)。「無教会」は教会の無い者の教会でありま

す」(内村、1901、71) + 「真正の教会は実は無教会であります」(同書、72)。
教会の否定あるいは欠如としての無教会／現実のキリスト教会を超える真のキリスト教会としての無教会

3. 内村と塚本虎二との対論。

両者における無教会主義理解の相違。

塚本の論文「無教会主義とは何ぞや」に対して内村が書き直しを求めた。『内村鑑三先生と私』に所収の「附箋附無教会論」には、内村が塚本の最初の論文原稿にどのような修正を求めたかが「附箋」として収録されており、内村の「無教会主義を知る上に於て貴き記録」(同書、20)となっている。

4. 附箋を引用。

「此辺少し言過ぎだと思ひます。南バプテストの如き、ルーテル教会の一部の如き克く我等と一致してゐます」、「此辺、全般的に事実ではありません、或教会では柏木を尊敬してゐます。今やすべての教会が柏木の敵であるのでありません」(同書、22)、「Either--or とする迄の問題ではないと思ひます。今は三十年前とは大分に異ひます。今や教会と死を賭して争ふべき時ではなく、彼等の友となりて導いてやるべき時であると思ひます。」(同書、27)

5. 無教会と教会を峻別し教会を端的に否定する塚本の無教会主義理解と、内村の無教会論との微妙の差異、いわば温度差。

「三十年前」：塚本の議論はある時期の内村、ある文脈での内村の論考にも見出すことは不可能ではないであろう。内村の無教会論は、一方でそこから、塚本の無教会主義が展開できる方向性を含みつつも、他方では、それを「言過ぎ」であるとする余地を残している。

その意味で内村は曖昧であるとも言えるし、柔軟であるとも言える。

→ 内村の弟子たちはそれぞれの仕方で内村自身の中に共存している可能性の内、一定の範囲のものを受け継ぎ発展させた。

→ 無教会キリスト教の多様性。塚本虎二はきわめて重要な位置を占めている。

塚本の系譜。無教会派聖書学者／無教会霊性派

6. 無教会派聖書学者。

「敗戦後の無教会運動における新たな展開として、まず挙げられるのが、欧米で学んだ聖書学者の登場である」(赤江、2013、257)。

関根正雄、中沢洽樹、前田護郎のいずれもが、塚本虎二と密接な関わりを有している。

7. 雑誌と集会の二つの活動形態のいずれにいても、聖書研究が中心。聖書研究こそが無教会の核心。

聖書研究：信仰的建徳的な聖書読解／近代的学問の性格を有する「研究」

塚本こそが内村の聖書研究の学的側面の継承者であった、その成果が塚本訳新約聖書。

8. 聖書学への展開と近代以降の神秘主義類型の動向と合致すること。

「神秘主義は学の自律性に対する親和性をもっており、学的な教養層の宗教性にとって避難所を形づくったのである。」(Troeltsch, 1912, 967)

9. 無教会は、日本においても形成されつつあった教養市民層の知的欲求に応じる側面を有していた。無教会の集会在教派教会以上に学校的性格を特徴としていた、無教会キリスト教には、近代以降の状況における神秘主義の展開に合致した教養宗教としての性格を確認ができる。

10. しかし、聖書学への展開は、無教会キリスト教において問題を生じないか？

無教会は19世紀の自由主義神学とは異なり、キリスト教の基本的な教理（神論、キリスト論、贖罪論、聖書論など）に関しては伝統的な理解にたっており——たとえば『内村鑑三選集 7 聖書のはなし』に収録された諸論考から得られる内村の思想はきわめて伝統的と言いうるものである——、それは聖書学がもたらす研究成果と衝突する可能性をもつ。

神秘主義類型の特徴とも言える個人主義的傾向は、聖書の読解における個人的な解釈につながることによって、集会としての無教会キリスト教の秩序との間で緊張を生み出す。

11. 聖書学や個人の聖書読解のもたらす解釈の幅に一定の制約を課そうとするならば、それは、関根正雄が指摘する「共通の言語すなわちロゴス」（関根、1948、15）としての「神学」とは別の意味での神学（いわば「教派的」な神学）を必要とする。

「紙上の教会」（読者のネットワーク）という点では、個人主義的傾向は大きな問題を生じないとも言えるが、集会としての無教会にとっては問題なしとは言えない。

12. 「無教会派霊性運動」と呼びうる動き（赤江、2013、262）。

その中核となるのは、手島郁郎の「キリストの幕屋」運動（宗教法人名は「キリスト聖書塾」。「キリストの幕屋」「原始福音運動」など）。

手島は塚本虎二に傾倒する無教会派の信徒であったが、神の臨在を体験し伝道活動を開始した。

13. 手島のキリスト教理解には、「聖霊のバプテスマ、癒し、異言などペンテコステ派の特徴」が顕著であり、このペンテコステ派的特徴が広まる中で、手島は「無教会運動の全面的な決別」に至ることになった（マリNZ、2005、160）。しかしその伝道雑誌『生命の光』には、当初塚本をはじめ無教会キリスト教関係者が手紙や論考を寄稿している。

14. 「手島の有力な協力者となったのが、先に見た関根正雄であり、東大のドイツ語教師・小池辰雄であった。彼らはいずれも塚本集会の主要メンバーであった。」（赤江、2013、264）

15. マリNZは、内村鑑三、松村介石、川合信水らの「土着運動」に続く「第二波の土着運動」として手島郁郎と原始福音運動を位置づけ、内村の無教会キリスト教と手島との関係を論じている（マリNZ、2005、157-169）。すなわち、手島と内村との関係は聖書研究をめぐるものである。

「聖書の原典に立ち戻り、独立したキリスト教土着のあらわれを展開しようとした内村の試みに、手島は強く共感した」（同書、158-159）、しかし、「手島によれば、無教会運動の教師はすぐれた聖書学者かもしれないが、新約にある生きた信仰が欠けている。」（同書、159）

16. 聖書研究：無教会派聖書学と無教会派霊性運動との重なり。そして、両者はここから分かれて行く。

手島的な霊性運動へ至る契機が内村自身にも潜在していた。

17. 内村は再臨運動との関わりを含めてしばしば指摘されるように、ペンテコステ派的な霊性運動には批判的である（岩野、2013、164-169）。

しかし、内村が信仰などを論じる際のポイントとなる「実験」は、直接的な体験という点での神秘主義的な側面と無関係ではなく、霊性運動とも重なりうる契機を内包していたと言えないであろうか。

18. 実験や経験という契機の強調は宗教改革に遡及する近代キリスト教の特徴の一つ。そ

れは聖書主義を生み出すと同時に、靈的体験の強調とも結びつくことができた。

宗教改革が内包していた諸動向が後に相互対立を伴いながら顕在化したのと同じ事態を、内村以降の無教会キリスト教の展開においても確認できる。

内村→塚本→聖書学的聖書研究と靈性運動。

19. ティリッヒ。宗教改革以降の思想の諸動向の展開について、「敬虔主義と合理主義との共通点は、神秘主義的要素である」、「ギリシア文化でも近代文化でも、合理主義は神秘主義の娘である」(ティリッヒ、1980、33)。

敬虔主義と合理主義との結合は無教会キリスト教においても確認できるのではないだろうか。これは、教会類型が後退する中で近代キリスト教に生じた事態なのである。そして、この二つの動向が相互に遊離し始めるとき、一方における知的で合理主義的キリスト教と、他方における熱狂的な体験主義的なキリスト教という分極が発生するのである。

文献

1. 内村鑑三「無教会論」1901年(『内村鑑三全集9』岩波書店、1981年、71-73頁)。
2. 赤江達也『紙上の教会』と日本近代——無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店、2013年。
3. Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften 1. Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen* (1912), Scientia Verlag, 1977.
7. 岩野祐介『無教会としての教会——内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』教文館、2013年。
8. 無教会史研究会編『無教会史Ⅰ 第一期 生成の時代』新教出版社、1991年。
9. 塚本虎二「附箋的無教会論」1930年(『内村鑑三先生と私』伊藤節書房、1961年、20-27頁)。
10. 関根正雄「無教会主義の弁証論」1948年(無教会史研究会編『無教会史Ⅲ別冊 対論——教会と無教会』新教出版社、1995年、9-39頁)。
11. 内村鑑三『内村鑑三選集7 聖書のはなし』岩波書店、1990年。
12. マーク・R・マリンス『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』トランスビュー、2005年。
13. ティリッヒ『ティリッヒ著作集・別巻三 キリスト教思想史Ⅱ——宗教改革から現代まで』白水社、1980年(原著は、1967年)。
14. 芦名定道「インターネットの普及が新しい可能性を開いた——「広報」から見たキリスト教」、宣伝会議『広報の専門誌 PRIR』2007. July. No.27、22-23頁。

(2) 矢内原忠雄と日本的キリスト教

・1893-1961

- ・無教会主義キリスト教、内村鑑三の弟子、経済学者。
- ・旧制第一高等学校2年生のとき内村に師事。住友鉱業所勤務を経て、1920年に東京帝国大学助教授(新渡戸稲造の後任)。
- ・植民地政策論、学問的分析手段としてのマルクス主義の方法論を評価しつつも、世界観としてのマルクス主義を退け、相対化。
- ・満州事変、日中戦争を契機として、国家・政策批判を展開し、論文「国家の理想」を執筆。37年学内外からの攻撃により、教授職を辞する(矢内原事件)。
- ・この間、土曜学校(29)、日曜学校(33)の家庭集会、49年から公開講義。
- ・伝道雑誌『通信』(32-37)、『嘉信』(38-61)を刊行。
- ・第2次世界大戦敗戦後、東京大学に復職。学部長、総長を歴任。

・著作

『矢内原忠雄全集』全29巻、岩波書店。

『キリスト者の信仰』全8巻、岩波書店。

『土曜学校講義』全10巻、みすず書房。

15. 『国家の理想——戦時評論集——』所収の諸論考。

「日本的基督教といふのは、西洋かぶれのしない基督教といふこと」であり、思想的経済的に西欧キリスト教会から自立した日本人による日本伝道を行う教会、つまり、矢内原の師である内村鑑三の目指したキリスト教に他ならない（矢内原、一九八二、一一六）。

日本人の心情——大拙ならば靈性——によって把握されたキリスト教。大拙の理解する鎌倉仏教と類似した論理構造。⁽¹⁰⁾

16. 日本のキリスト教は、「日本人の心によつて基督教を把握するといふ事」である（同書、四三七）。

「基督教は日本精神の美点を發揮するものであると共に、其の足らざるを補ひ、及ばざるを純化すべきもの」であつて、「基督教は我が国体に反しないといふことが、基督教会の繰返しての主張であり、又其の実行でもある。私もさう信じる一人である」（同書、一一八）。

→ キリスト教は単なる外来宗教ではなく、日本人の心情に根差したものとなるべきであり、またそうなることは可能である。

17. 「既に多くの人が指摘してをる通りに、基督教は西洋に伝ひ西洋諸国を真に興した一つの大きな精神力でありますけれども、基督教即西洋ではありません。基督教はアジアから興つたのであります。イエス・キリストはアジア人である。聖書はアジア人の心でなければわからない」（同書、四三七）。大切なのは、「之を私共が欧米人を通して習うのでなしに、日本人の心を以て直接神様から」習うこと。

18. 矢内原の提唱する日本キリスト教は『日本的靈性』における大拙の議論よりも——『日本の靈性化』『靈性的日本の建設』は別にして——、日本精神に対する批判性を鮮明に示している。「キリスト教」。

19. 真の愛国は、旧約聖書の預言者イザヤの場合のように、正義と平和という国家の理想に基づいて現実の国家の誤りを批判しつつ表明されるものであつて、「愛と平和と正義の上に立つ民族主義」（同書、三二五）。

20. 矢内原を東京帝国大学教授辞任に追い込むことになる「一先ず此の国を葬つて下さい」という言葉。「真の愛国」という地点から発せられた。⁽¹¹⁾

これは、「国体信仰に封印された閉ざされた愛国心」を批判し、「理想を亡失した現実国家日本の不義」を撃つものと評することができる（大濱、二〇〇六、六三一六四）。しかし、以上の近代日本の歴史的現実に対する鋭い批判にもかかわらず、「日本民族は天皇の臣民であると共に、天皇の族員である。之が日本民族の伝統的な民族感情であり、国体の精華である」（矢内原、一九八二、三五九）と言ひ得る点で、矢内原の日本的キリスト教は、外来宗教であることを脱却し日本的靈性の表現となつたキリスト教であると解釈してよいであろう。

21. 大拙の理解する鎌倉仏教が仏教自体の新しい可能性の開花であつたのと同様に、日本のキリスト教は、キリスト教自体の新展開である。

「それは日本精神の美を發揮し、英米人も独逸人も他の如何なる民族も為し能はざる処の新しい貢献をば、基督教真理の研究と開展に附け加ふる積極的なものでなければならぬ」、「其の意味に於てのみ日本的基督教の運動は、基督教歴史の一大時期を劃するものであり得る」（同書、一二〇）。

22. 日本のキリスト教は、キリスト教の新しい可能性を切り開くものであるとともに、日

本が世界に貢献することを可能にする。

「日本的基督教の使命は、第一には、日本人の心によつて基督教の深い真理を、深い深い基督教の真理を新に把握する、新なる角度から把握する、之が第一であります。第二には、斯くして把握したる基督教によつて日本の国を高める事である。さうして日本の国によつて世界を高める事であります。」(同書、四三八)

<文献>

矢内原忠雄(一九八二)『国家の理想——戦時評論集』岩波書店。

網野善彦(二〇〇〇)『日本の歴史00 「日本」とは何か』講談社。

大濱徹也(二〇〇六)「キリスト者にみる日本への目——矢内原忠雄を場として」

『明治聖徳記念学会紀要』復刻第四三号、六二一七一頁。

小熊英二(一九九五)『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社。

小坂井敏晶(二〇〇二)『民族という虚構』東京大学出版会。

注

(10) 矢内原が大拙と同様に鎌倉仏教や元寇を念頭に議論を行っている点については、次の引用より確認することができる。つまり、両者の議論の比較には十分な根拠があるのである。「昔日本に仏教の伝はつた時、弘法大師は本地垂迹の説を立てて、仏教の諸仏と日本の神々とを同一人格視した。此の伝道方法によつて、仏教は日本の国土に根を下ろしたのである。基督教も亦日本の国家に根を下し、日本人の心情に植えられる為には、是非とも西洋かぶれしない日本的基督教でなければならない。そして日本精神日本主義に妥協し迎合すればする程、基督教は容易に日本の宗教として普及するであろう。」(矢内原、一九八二、一一八)、「日本が嘗て歴史上に経験したる最大非常時の一つは、鎌倉時代に於ける元寇であつた。其の時日本の上下は不安動揺の中に混乱したが、ただ一人動かなかつたものは日蓮上人であつた」、「日本国は彼の信仰によつて支えられたのである」(同書、二七八)。

(11) 「一先ずこの国を葬って下さい」に現れた矢内原の思想については、今滝憲雄「矢内原忠雄——罪人の首と日本国の柱」(芦名定道編『比較宗教学への招待——東アジアの視点から』晃洋書房、二〇〇六年、一一四——一五頁)を参照いただきたい。

1. 芦名定道

「現実の宗教と宗教の理想」(『世界思想』2002春、29号、世界思想社、1-4頁)。

「日本的靈性とキリスト教」(明治聖徳記念学会『明治聖徳記念学会紀要』復刊第44号、2007年、228-239頁)。

「キリスト教平和思想と矢内原忠雄」(現代キリスト教思想研究会『アジア・キリスト教・多元性』第13号、2015、1-18頁)

2. 岡崎滋樹「矢内原忠雄研究の系譜——戦後日本における言説——」(立命館大学社会システム研究所『社会システム研究』第24号、2012年、223-262頁)。

(第28号、2014年。査読研究ノートとして次の二つの論文が掲載)

・キリスト教ナショナリズムと内務官僚としての南原繁 — 赤江達也著『「紙上の教会」と日本近代 — 無教会キリスト教の歴史社会学』(岩波書店、2013年)を読んで — (西田彰一)

・矢内原忠雄のインド金融論における史料運用方法の分析 — 日本における地域研究の成立期の在り方について — (伊澤裕二)

(3) 南原繁と政治哲学の源泉

- 1889-1974。香川県生まれ。
- 政治学者、無教会キリスト者。
- 旧制第一高等学校を経て東京帝国大学卒（1914）、一高在学中に新渡戸稲造の感化、内村鑑三聖書研究会連なる。内務省を経て、1921年に東京帝国大学法学部に転職。ヨーロッパ在外研究を終え教授（1925年）。
- 政治学史、政治学を担当。
- 『国家と宗教』（1942年）。国家の本質を闡明することを通して、デモニッシュなナチズムと日本のファシズムを批判。
- 法学部長（1945年）を経て東京大学総長に就任（1945-51年）。日本学院院長（1969年）。
- 『フィヒテの政治哲学』（1959）、『政治理論史』（1959）、『政治哲学序説』（1973年）。
- 歌集『形相』（1948年）。

- 著作
『南原繁著作集』全10巻、岩波書店。
- Richard H. Minear (edited and translated), *War and Conscience in Japan. Nambara Shigeru and the Asia-Pacific War*, University of Tokyo Press, 2011.

- 南原繁研究会：<http://nanbara.sakura.ne.jp/>
研究会編論集（to be シリーズ。EDITEX）
- 山口周三『資料で読み解く 南原繁と戦後教育改革』（東信堂、2009年）、
『南原繁の生涯 信仰・思想・業績』（教文館、2012年）。
- 下島知志『南原繁の共同体論』（論創社、2013年）。
- 芦名定道「南原繁の政治哲学とその射程」
『日本哲学史研究』第13号、2017年3月、pp.33-58、
京都大学文学研究科・日本哲学史専修。